教えて！Q&A

Q1 担任として、不登校の対応を考えているのですが、良い方法が見つかりません。今後どうしたらいいですか？

A1

学級担任として原因や対応を考えることが大切ですが、なかなか良い方法が見つからないことがあります。そのときは、担任一人で抱えず、早期に学校全体（チーム学校）で情報共有や対応を考えていく必要があります。

校内体制を整え、ケース会議を開くと良いと考えます。構成員は管理職、学級担任、学年主任、生徒指導主事や養護教諭、特別支援教育コーディネーター、SC、SSW 等が考えられます。それぞれの情報を共有して、対応を検討します。実施者、支援内容、支援の時期や期間を確認し、役割を明確にした対応をしていくことが大切です（⇒p.4）。

Q2 不登校の背景として、発達障害があるのではないかと感じています。発達検査を受けてもらいたいのですが・・・。

A2

学校生活での適応に困難さが見られると、発達障害によるのではないかと考えることがあります。発達障害に起因する表出と類似した表出は、別の要因から生じることもあり、例えば以下の 5 点が考えられます。

① 養育上の困難さや愛着の形成に課題がある等の家庭環境に起因する場合
② 対人関係上のトラブルで、トラウマを抱えている場合
③ 学校（学級）の環境が落ち着いていない場合
④ 教師の話し方や発言の一部等が子どもと合わない場合
⑤ 精神疾患を発症している場合　等

子どもの表出を把握するには、多方面から情報を収集し、アセスメント（子どもの状態を知ること）をし、SC や SSW に相談します。その上で、発達障害の特性が疑わしい場合には、窓口（市町の発達支援相談）や医療機関を保護者に紹介します。

発達検査等の結果を元に行う保護者との面談等では、SC や SSW の同席を得ることで内容の理解が深まることもあります。結果は丁寧に取り扱い、支援を充実させていくことが重要です。加えて、保護者と良好な関係を維持することも大切です。

Q3 不登校の子どもに支援をしたいと思うのですが、要因が分からない場合は、どのような働き掛けをしたらよいでしょうか？

A3

不登校の要因は、現在起きたことに因る場合もありますが、今までの環境や生育歴等の過去に起因している場合も考えられます。まずは、保護者や学年の教職員等から現状を、前年度の担任等から過去の情報を収集します。集約した子どもの姿や心理から、現在の不登校状態の時期を確認します（⇒p.60）。おおよその時期が分かると、アセスメントの助けとなります。その後、保護者と登校刺激等の必要性についても共有します。他機関と連携していれば、医療や福祉等の見地から、アドバイスを得ることもできます。

不登校の要因は、複数の事柄が複雑に絡み合っていることもあります。現状を客観的に理解し、子どもの得意な点や周囲の強み等をきっかけに対応することで、子どもが安心感を得て自信や意欲等を取り戻し、自分から動き出すことにつながると考えられます。なお、高校生の場合は、授業の欠課時数などが進級に大きく影響します。時間は限られますが、自分自身がどうありたいのか、自分に合った生き方や進路を考えることも大切になるかと思います。

Q4 学校に行けない（行かない）子どもに対し、その後の回復や次のステップをどのように考えればよいでしょうか？

A4

多少の外出が可能となった時期を想定すると、学校に戻る生活、または、学校以外の場所へ行く生活が考えられます。

学校に戻る生活を考える場合、登校時刻や在校時間、滞在場所（校内教育支援センター、保健室、教室等）の工夫が必要です。子どもの心身の状態や思いを押さえたうえで、学校が実現できることを考えることで、段階を追って学校生活に移行していくことができます。

一方で、学校以外の場所（市町の教育相談センター、市町の教育支援センター、フリースクール等）へ行く生活も考えられます。利用に当たっての条件や手続き等については、各市町の担当課等で情報を得ることができます。子どもにとって安全・安心であり、自分らしく過ごすことができると感じる場所であることが大切です。利用に向けて、どの施設をいつ、どの程度利用したいのか等を、子ども自身が関係者と共に話し合い、選択・決定していくことが望ましいでしょう。そうすることで過ごし方の見通しが持て、生活が整っていくと考えられます。また、自己選択や自己決定の力が身に付くきっかけにもなっていきます。さらに、医療や福祉と連携している場合は、継続して利用することで、子どもの安心にもつながります。

Q5 保護者が、「うちの子は学校へ行かなくてもよい」と考えている場合、どう対応したらいいですか？

A5

基本的な支援の視点は、「『学校に登校する』という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す」ことです（⇒p.2）。教師として、この視点を理解した対応が求められます。その上で、「学校に行かなくてもよい」と考えている保護者には、どのような思いを抱えているのかを丁寧に聴き取ります。例えば、学級に苦手な友達がいる、担任の話し方が気になるなど学校要因があれば、可能な対応を検討します。対応困難であれば、できる範囲での代替案を示し、今後の方向を考えます。また、保護者が子どもの現状を理解しており、登校刺激を控えたいと考えている場合であっても、子どもの思いや状態を保護者と共に、理解することが大切です。不登校状態の時期を確認し、子どもの思いを十分に汲むことで、より良い関わり方を考えられます。

一方で、学校以外の居場所を探す方が良いと考えている保護者や、登校させることに疲弊した保護者もいると思います。いずれの場合であっても、保護者の大切にしたい思いを丁寧に聴き取り、子どもの思いや状態を確認して、共により良い方法を考えていこうとする、学校側の姿勢を伝えることが必要です。

大切なことは、学校が子どもにとって安全・安心な場所になっているかという視点です。合理的配慮を提供し、環境を整えても子どもが安心できないと感じた場合には、学校以外の場所を考えることも必要になると思います。

Q6 保護者自身も困難な状況を抱えているようで、歩調を合わせた支援が難しいのですが、どのように対応すればよいでしょうか？

A6

子どもの家庭環境は様々です。経済的な困窮が心配される家庭や保護者自身が困難な事情を抱えている家庭等も考えられます。基本的には、保護者とじっくり面談をする中で、保護者が困っている状況やその思いを共有し、学校ができる支援を示します。必要に応じて、心理の専門職員である SC、福祉の専門職員である SSW とも積極的に相談をしながら学校以外の機関とも連携を図り、「一緒に考えていきましょう」という学校の姿勢を示すことが良いかと思います。

ケース会議の開催に当たっては、特別支援学校のセンター的機能（⇒p.20）を活用し、他機関との連絡調整や運営方法等不明な点などを相談することができます。